

## 平成22年度 第38回東大谷高等学校1年生研修会 に参加して

### 【1日目】

毎年恒例となっている1年生の研修会が、5月6日（木）から1泊2日の日程で、奈良県吉野郡吉野町でおこなわれた。午前9時半にバスで阿倍野を出発し、ちょうど2時間で宿泊先の芳雲館に着いた。旅館は中千本の高台にある5階建ての鉄筋コンクリート造りで、毎年この旅館を利用しているという。旅館の部屋からは吉野山の雄大な景色が一望でき、近くには国宝の蔵王堂や後醍醐天皇の御陵もある。時折、ウグイスの鳴く声が聞こえる。



(バスの中)



(芳雲館)



(吉野の自然)



(国宝の蔵王堂)

昼食のあと、午後1時半からさっそく大広間で研修が始まった。学校長の講話に続いて、指導部長、学年主任の講話が続く。「縁」があってこの世に生まれてきたのだから、その命を大切にしてほしい、言葉遣いや礼儀作法がきちんとできるようになってほしい、16歳から18歳というこの時期に大人として成長してほしい、そのためには「我慢」できる人間になってほしいといった講話がなされた。講話の間、生徒は基本的に正座である。目を閉じて講話を聴いていると、あたかも周囲には誰もいないような錯覚に襲われる。それほど静寂な中で研修がおこなわれた。



(正座で講話を聴く生徒)

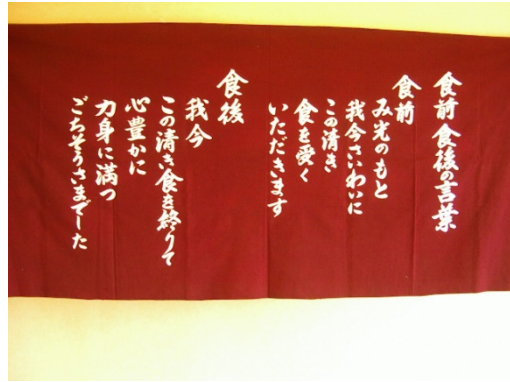


(礼儀作法の練習)

講話のあと各クラスでミーティングがおこなわれ、その後、入浴をすませたあと夕食である。食事研修の一部である。命あるものをいただくことに感謝する食前・食後の言葉をみんなで唱和する。後かたづけも、生徒が分担しておこなう。食事はハンバーグと鍋である。中にはアレルギー体質の生徒もおり、そうした情報は事前に調査して旅館に伝えて配慮してもらっている。みんな非常においしそうに食べていた。講話の時の「静」とは対照的に、屈託のない明るい笑い声が絶えない食事風景であった。



(いただきます)



(食前食後の言葉)



(←食後の後かたづけも自分たちでおこなう)

夕食のあと、7時半から大広間で再び講話が始まる。今度は宗教科の先生の法話である。この世の中では、あらゆるものが自分に語りかけてきており、言葉の言葉を越えたメッセージをつかめる「知恵」を身につけた人間になってほしいということをご自身の体験を元にお話しされた。東大谷高校では話のうまい先生が多いが、この宗教科の先生も大変お上手である。「えー」とか「あー」とかいった余分な言葉がいっさい入らない。話し言葉がそのまま活字になる。50分の時間があっという間に過ぎた。



法話のあと午後8時30分から、スライドを使って本校の歴史や3年間の学校行事などが紹介された。このスライドを見て、生徒たちはこれからの3年間のおおよそのイメージを持てたのではないかと思う。



10時就寝。宿泊を伴う学校行事では、生徒を寝かしつけるまでが結構大変だったりするのだが、騒ぐ者もなく、本校の生徒の「品」の良さを感じた。

(スライドを使った本校の紹介)

## 【2日目】

2日目は初日の晴天とはうってかわって、残念ながら朝から雨。予定では指導主任の講話を聴いたあと、山道を使って如意輪寺（にょいりんじ）まで行く計画をしていたが、足場が悪いためコースを変更して舗装された道を使って如意輪寺まで行くことになった。みんなで傘を差して片道30分弱の道のりを散策がてら歩いた。



如意輪寺には、北條幕府を倒したあと（1333年）、足利氏との争いのため京都から吉野へ逃れ、失意のうちに亡くなった後醍醐天皇の御陵がある。また、楠木正行（くすのきまさつら）の一族朗党 143 人が四條畷の決戦に向かうに当たり「かゑらじと かねておもえば梓弓 なき数に入る 名をぞとゞむる」との辞世の歌を残した扉もある。吉野は南北朝という日本の歴史を本当に身近に感じられる場所でもある。



(如意輪寺住職の説明を聞く)



(後醍醐天皇の御陵の前で)

如意輪寺から帰ったあと、昼食をとり、午後1時15分宿舎をあとにした。わずか1泊2日の宿泊研修であったが、中身の濃い研修であった。日頃、教室では見られない生徒の一面を見ることができたし、また、生徒同士の親睦の輪も広がった。2ヶ月前までは「中学生」であった生徒たちが、この研修を通じて「東大谷高校」の生徒に大きく脱皮できたのではないかと思う。今回の研修の目的である「本校の宗教的情操教育を理解する」「躰の指導に基づいた規則正しい行動をとる」「共同生活の基本的マナーを身につける」という成果を十分にあげることができた研修であったと思う。( 文責 南 )